



インドハムフェスティバル参加記

JA3UB

三好 二郎

この始まりは4半世紀にわたって付き合いのあったVU2RBIとの久しぶりのアイボールQSOからです。

先ず始めはThe National Institute of Amateur Radio(NIAR)主催によるHamfest-2007の準備でした。

そしてHamfestは2007年1月15日～17日の3日間、Lakshadweep IslandsのKadmat島で開催されました。

これに参加する海外のアマチュア無線家に対して1月15日～25日の間に特別局VU7RGの運用がインド政府より許可されました。

海外からの参加者33名が3島 (Agatti, Bangaram, Kadmat) から同じコールサインで運用しました。アマチュア無線家であった故Rajiv Gandhi首相 (VU2RG)に因んだインドにとっては特別なコールサインです。

Hamfest直前になって申請をしていたインドの無線家だけによる特別局VU7MYがMinicoy島から運用されることになりました。

Lakshadweep諸島からの運用許可をもらう事は、インドのハムにとっても非常に難しく今回の許可を得るに当たり NIARの長期にわたるインド政府との交渉がありました。

2006年4月にHamfest-2006がアングマン島で開催され、その時にVU4ANという特別局で海外のアマチュア無線家がオン・エアした時に多くの政府関係者が参列し、アマチュア無線をインド政府や国民へのアピールも、今回の許可の大きな要因になったと思われます。

しかしアングマン島とLakshadweep島との違いもあり、許可をもらうまでには、大きな困難がありました。

一般的にいわれているDXペディションとは少し趣の違う形での許可を受けなければならず、その違いを理解するのに参加者自身も少し戸惑ったかもしれません。

2006年の8月にIACという委員会が作られ、その中の3名がNIARの会長VU2MY, VU2RBI等と共にインド政府の関係機関を2日間訪れ、申請書の提出や、何故Lakshadweep島からの運用を望んでいるのかを何人もの関係者に説明しました。しかしどうしても理解してもらえない部署もあり、丁寧な説明の末に、やっと2007年1月の許可が下りました。

これがVU7RGへの第一歩でした。

その後、多くの部署での許可が必要であるためにNIARは関係各省を回り、それぞれから2006年10月によく許可をもらえた見通しがつきました。

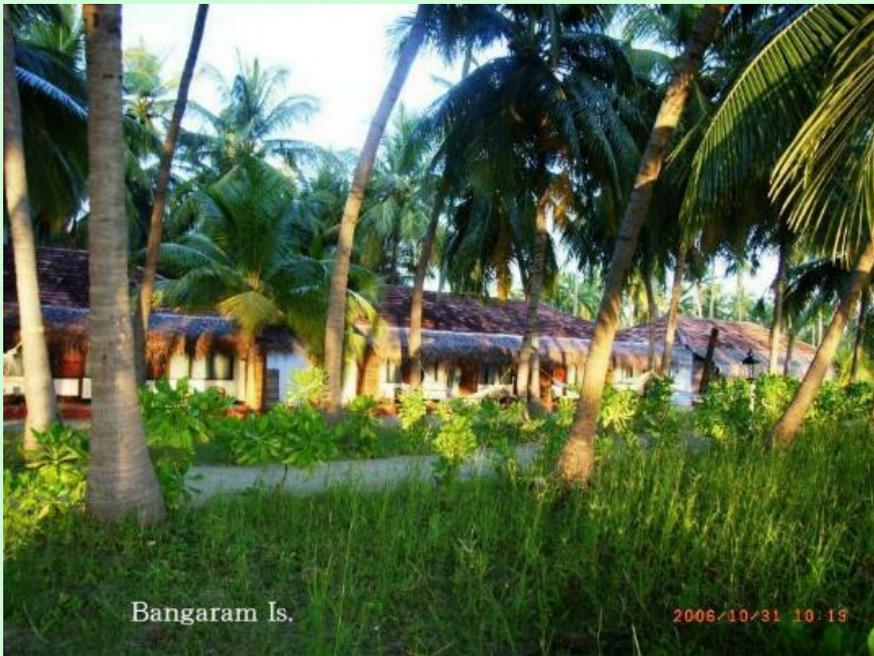
その間、インド政府内でもこのコンベンションやアマチュア無線へ対して、大きな理解を示してくれる担当者も多く出てきて少しずつ前進していきました。

最終的にインド政府関係者の大きなバックアップによってこのHamfestを開催することができました。

その間に海外からの参加者は多くの書類の提出を求められました。諸般の事情で2006年12月に変更されたものの再度当初の通り2007年1月の開催となり、いろいろな面で参加者自身も多少混乱した時期もありましたが、最終的に海外からの参加者は33名となりましたが、当初の予定通り3島からの運用が無事に行われたのは、IACとNIARの強い結束によるものであったと思います。

結束によるものであったと思います。





Bangaram Is.

2006/10/31 10:19

当初よりMU7RGは"ワンチーム"であるとの言葉が最後まで貫かれ、運用終了後Cochinで参加者全員が集まったミーティングで聞かれ"素晴らしいチームだった"と全参加者が言いましたが、特に45回のDX Pedlを経験しているK4UEEが今回のが一番よかった言ったことは印象的でした。現地へはインド本土のCochinから一番目の島、Kadmat島の沖合いに到着し、次にAgatti島に行き、我々の運用したBangaram島へは更にAgattiから小船で約2時間かかりCochinを出てから到着まで約27~8時間かかりました



Team Minicoy



Agatti Is.



Agatti Is.

01/18/2007 08:57:02

運用した3島はかなり離れていて、勿論定期便などなく、チャーターした船での移動なので他の島に行く事は簡単には出来ない状況でした。3島はそれぞれに特徴があり、我々が運用したBangaramは無線運用地としては、一番条件が良くなかったのではないかと思います。珊瑚礁の美しい海と白い砂浜のこの島は、自然をとっても大切にしている別世界のような所でした。2006年の10月に一度NIARのメンバーと下見に訪れていたのですが、運用条件としては他の島より問題があることは判っていたのだが、ここは故Rajiv Gandhi縁の地とのことでインド政府が許可を与えたこの島からの運用を決断しました。2006年12月半ばに主なリグやアンテナ等装備一式をインドに向けて送ったのに、私たちが島へ到着した時点では、その荷物が着いておらず手荷物として持参したもので1月15日の運用をスタートしました。

Bangaramチームは直前になって当初の予定をかなり変更しなければならなくなり 最終的には、YL2人とOM2人の計4名での運用となりました。アンテナの設営時には、島で働いている人に合間をみて手伝ってもらって、ようやく持参した八木アンテナを建て本格的に運用を始めたのは1月16日の午後でした。IC756プロとFT1000MPMARK を使用しましたが人員等の関係で、一人での運用が主になってしまいました。ソーラーバッテリーによる電源の供給には注意を必要とし、突然の停電もありエアコンは勿論、TVも電話もない場所での滞在は、多少ストレスが溜まったようにも思いました。コンディションの把握はしていたのですが、その日によって大きく変動する日々が続き、バンド状況の把握が非常に難しく思いました。



アンテナはビームの他に、G5RVを初め何本かのワイヤーをココナツ椰の木に上げて運用しました。コンディション等の関係でやはりJA向けの時間が多くビームアンテナでの運用がメインでした。今回特に感じたことは、バンドによってはEUとJAが同時に開け、JAにビームを向けていてもEUの信号がとても強力に入感することがありました。Wに対しては、各バンド共開ける時間帯が短くQSOが少なかったのが印象的でした。それに比べ、EU各国のパイルアップは途切れる事がなく、ヨーロッパのハム人口の多さを再確認した思いでした。QSO数やその他の詳細なデータについてはVU7RGのHPをご覧ください。

このHamfestの開催はVU2SON(Sonia Gandhi)VU2DMK(Dayanidhi Maran大臣)を始め政府関係者のサポートによって実現し、Hamfest行事の一環として無線局を運用することになり、海外からの参加者に運用許可が下りたという少し特殊な事情を理解していただきたく思います。多くの方のご協力、そして世界中からの沢山の方とのQSO等のお陰で、VU7RGが素晴らしい成果で終わることができた事に感謝いたします。

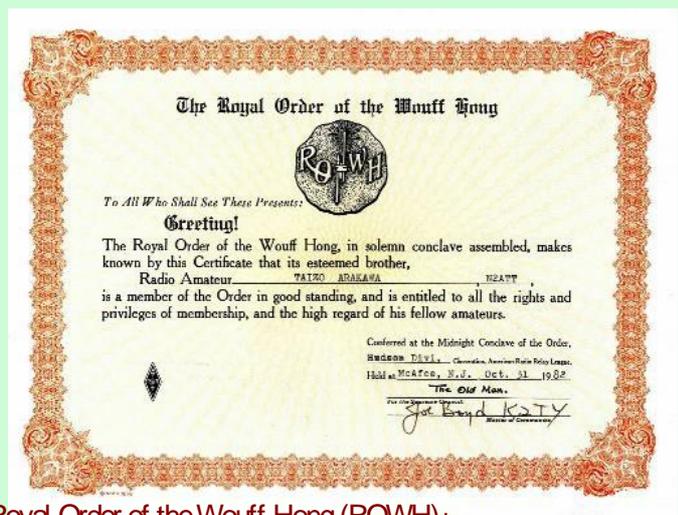
このHamfestに参加した事によって時を同じくし、同じ経験をした参加者はその思い出をいつまでも忘れないと思います。我々メンバーがたったの4名の弱小チームでしかもYL2名、半病人の小生という構成ながら、準備段階から全ての行事に参加した唯一のチームであったことを誇りに感じています。

アマチュア無線の賞状あれこれ

J3AER, 荒川泰蔵



「Osaka - San Francisco Sister City 20th Anniversary Award」
この30年前のAwardをお持ちの方は多く、決して珍しいものではありませんが、ちょうど今年2007年が大阪とサンフランシスコの姉妹都市締結50周年に当たり、各地で色んな行事が行われ、また計画されていますので、引っ張り出してきたものです。クラスはBですので難しいルールではなかったと思いますが、このAwardを受領した1978年に転勤でアメリカに赴任したものですから、私にとってはアメリカ赴任前の最後の思い出の1枚です。



「The Royal Order of the Wouff Hong (ROWH)」
これはAwardというより、会員証なのですが、日本では多分珍しいものだと思いますので紹介したいと思います。Wouff Hong (ウフンに近い発音をしていたと思います)は図の上方真ん中にある奇妙な形をした木製の道具です。これは何かを白状させる時に指を詰めて(切り落とすのではなく)攻める道具と聞いていますが、なぜかアメリカの古い無線のシャックに飾ってあることがあります。これは1982年のARRLのコンベンションに参加したとき、真夜中に何か行事があるというので一室に出かけてみました。やがて奇妙な牧師のような衣装をまとった何人かがお祈りを唱え、参加した一人づつにアマチュア無線を愛しルールを守って運用するか(詳細は忘れましたが)とそれを誓わせ、うなずくと、メンバーになった証拠にとメンバー間の握手の方法と、その時唱える呪文を教えてくださいました。そして発行してくれたのがこの会員証なのです。アメリカならではのユーモアのある行事ではありませんか。



電線類の地下埋設も高野に於けるStrategic View か・・・

世界遺産としての高野山

- 宗教環境都市の景観 -

高野町長 後藤 太栄 / H3GAH

・「遺産」という誤解

以前から主張していることであるが、「世界遺産条約」に「遺産」という訳語が使われているために生じる誤解がある。「遺産」という単語には過去の遺物というイメージが重なるからである。世界遺産の理念は過去の遺物のリスト化ではなく、人類普遍的価値観の共有にある。また、文化財など形ある「モノ」のリスト化とも捉える傾向もあるが、決してそうではなく、その「モノ」とその「モノ」が存在する条件や状況とが両立しての所謂「普遍的価値」のリスト化である。

高野などの登録地域にはそれぞれの成立条件や存在意義がある。高野は言うまでもなく弘法大師空海のご誓願に基づいて成立し持続してきた。その根元的な意味合いは千二百年を経過した今もまったく変わりが無い。そのことを再確認するだけで我々が成すべき事が見えてくる。

過去の遺物をリストにすることが世界遺産登録の目的ではないとするなら、世界遺産に登録された地域は何をすべきなのか、特に景観に関して私の考えを述べてみたい。

宗教環境都市とは

現在、高野町は『宗教環境都市』をコンセプトとして行政を行っている。ここで言う「環境」とは水や空気などの自然環境だけを意味するのではなく、人と人、人とモノ、人と自然、そしてモノと自然との関係性も含めた意味で使っている。

つまり高野は開創当時からそれらの関係性の中で存在してきた町であり、それが高野の普遍的価値だと云っても過言ではない。

この町で建造物を所有し管理する者は個人であれ組織であれ、建物は個人（組織）の所有物だが、景観は公のものである」と強く認識する必要がある。

なぜならば、高野の風情と存在価値を維持してきた「環境」を構成する大きな要素である景観に配慮することが、高野の普遍的価値を維持してゆく為には不可欠であると考えられているからである。

・木造建築物観の変化

木造の建物に対する日本人の価値観は戦後急速に変化した。木造建築のデメリットばかりが強調され、その結果、生活文化の必然として日本全土で培われてきた建築技法が著しく軽視されるようになってしまった。気候の変化やライフスタイルの変化による非木造化への緩やかな移行であるならば、現在のような街並みにはな

っていないであろう。明らかに日本国民全体が支持した国の近代化の方向性に同調した結果に見える。それでも他の町や地域と比べると本来の存在意義に叶った町へ回帰することは容易だと感じている。

高野におけるStrategic View

西洋にはStrategic Viewという考え方があるらしい。それは戦略的眺望とでも訳せばいいのだろうか。たとえばロンドンではセントポール寺院とビッグベンが同時に見えなければならないらしい。それを阻害するものは人工物であれ、自然物であれ一定のルールで排除するという。

高野にも戦略的眺望は必要かも知れない。というのは眺望という意味では壇上伽藍にそびえる根本大塔は山内（境内）のあらゆる場所から見えることが、宗教的な観点からも必要ではないだろうか。また、六時の鐘の鐘の音が条件によって、現在でも希に一の橋あたりで聞くことができるが、ほとんどの場合は木々や建物に遮られ、その上都市型の騒音があるため聞こえない。

成長し過ぎた木々を間引いたり、戦略的に建物や自然物を配置、構築することが今後必要だと感じている。あらゆる手段と英知を集結して連続的な街並みを再構築し、その上で静寂な境内を取り戻すことが、結果としてあらゆる職種の住民の利益にもつながると確信している。

建築不自由の原則

西洋は建築不自由の原則であり、日本は建築自由の原則だと云われている。

日本人の民族性から原則的に建築は自由であっても、連続的に協調性に満ちた街並みをステークホルダーの合意の元で形成する、という概念が欠落してしまった今、山内（境内）においては建築不自由の原則という概念の導入も視野に入れねばならないであろう。

具体的には聖なる部分は本山の山規で、俗なる部分は町条例で戦略的に「世界遺産としての景観」を再構築していくムード作りを急ぐべきである。

また、国の景観法の指定を受け、積極的に街並みの再生に取り組む方法も一案であるが、最も大切なことは「世界遺産としての景観」が「聖地としての景観」と完全に一致することを理解することである。

高野を訪れる者、住む者、すべてに利益のある高野式Strategic Viewの構築を急ぎたい。